

## アタヴィズム : 亡国のエトス

田吹, 長彦  
北九州市立大学外国語学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6792846>

---

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.479-480, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



## アタヴィズム——亡国のエトス

田吹 長彦

昭和 38 年秋、六本松の教養部から箱崎に移った。市電の終点に近い正門の左手奥に法文系の建物があった。ケンブリッジのカレッジのように古色蒼然とした建物の中は薄暗く、書庫には古典がギッシリと詰まっています、少し明かりが欲しいといった感じであった。英文科進学生 15 名の中で男は僕一人だった。最初の授業の直後、前川俊一先生が「聞きたいことがあるので研究室に来なさい」と言われた。部屋に入ると先生は即座に、「君、将来はどのようにするのですか?」と言われた。咄嗟のことで、やや躊躇して「大学院に進学します」とこたえてしまった。期待されたのはこれだと直感したからである。不肖の弟子が親方に突然詰問されて、「はい、あとを継ぎます」と言うのと同じであった。「男子の本懐」と思ったのかも知れない。大分の田舎出の少年が、1 年半の大都会暮らしで「大学院」の存在意義などわかるはずはない。中学のとき、女の友達に「大学に行くの?」と質問されたことがある。「大学」というものがこの世にあることなど、全く知らなかった。「人目から半ば隠れた苔むす岩陰に一輪だけ咲くスマレ」、あのルーシーのようでもあった。半年で、威厳のある場所から「追い出されて」現在の建物に移った。思えば「焚書坑儒」はあの頃に始まったのかも知れない。新築だが精彩がない。アカデミックな香りは一切ない。その中で「男はつらいよ」の時代が始まった。同級生の女性諸君は名実ともに精鋭揃いで、内心それが誇りでもあった。先輩諸氏も秀才揃いで、大学院に進学したその後ろ姿を見て、それに続いた。T.S.Eliot の詩を哲学者然と朗唱し、駄文を書いた。三十路を過ぎて、この男に飽きが来て、ロマンを求めた。長編詩のみ、シェリ

一、キーツと読み、バイロンにはまってしまった。すてきな人間というやつはたいい馬脚をあらわし、幻滅することもあるが、この男、只者ではない。時代をこえた「おんぶお化け」のように、取り憑いたら離れやしない。35年近くも・・・である。連れ合いは、「死んであんたが地獄なら、あたしゃ天国に、あんたが天国なら、あたしゃ地獄に行く。生まれかわっても、金輪際会いたくない。もうこの世でたくさん!」と豪語する。「ああ、そうですか、ボクは生まれかわってもバイロンをニコニコと読み続けます、資料はたっぷりとためてますから・・・」と小声でやり返さざるを得ない。だがここで一つの苦悩・難問が生じる。他界した畏友のひと言、「あのね君、アタヴィズムだよ、今の英語世界。文学なんかできっこないよ。」これが現実となってくるようだ。OEDの atavism の定義の中に、“tendency to reproduce the ancestral type in animals or plants” というのがあり、1872年の引用例に “Some mysterious atavism—some strange recurrence to a primitive past” とある。英語教育はようやく明治時代の「初歩」に戻りつつある。こましゃくれた幼児のようにお上手に喋りまくって「使える英語」に飽きたら、英知の集積である古典を追い求める時代が再来するかも知れない。さすれば、「ああ、不覚にも“a primitive past”を追い求めていたのだ」と述懐し、「失われた時代」に切齒扼腕しつつ涙を流すに違いない。それも、人間に英知というものがあればのことだが。ここではひとまず、亡国のエトスに、「アーメン、南無阿弥陀仏」と念仏を唱えるのを忘れないでおこう。『ヨーロッパ夢紀行、詩人バイロンの旅——ベルギー・ライン河・スイス編』(丸善出版サービスセンター)、ご購入願います。赤字です、古典は売れません!!!